

『週刊教育』1953年7月（新日本教育協会）

## 積み上げる教育

矢口 新

教育界の流行は、自動車の新型の流行に似ている。年々新しい型があらわれてめまぐるしいようであるが、そればかりでなく、自動車の新型を製作して売り出す本家本元がアチラである如く、教育の流行もアチラものである。尤も流行は世界的規模のものらしく、衣裳の流行はパリで作られるというから、教育の流行もアチラ製で一向に差支えはない。

だがアメリカ辺りで自動車会社が何年度の新車をどういう型にするかを考えるのは、実際に売り出す年の三年も前なのだそうである。そしてそれから三カ年間、あらゆる実験、試験をへて、そのあげく製作、販売ということになる。その道の人の話によると、日本の自動車工業はそういう新型車を独創してアチラものと対抗する力は今の所とてもないそうである。勢いパテントを買って間に合わせるということになるが、これが後進国的なのだそうである。

だからたとえ街上を同じ新型車が走っていたとしても、日本の自動車工業が進歩したことにならない

いのである。そういう車に乗りおくれないうことばかりを気にしている人がいるとしたら、むしろ哀れではないか。九官鳥のなげきであるろう。

私は何もここで今の教育がアチラ製だからいけないなどという愛国的言辭を弄しているのではない。そんなことを言う前に、自分自身以外ものではないことをさとるべきではないかということである。せのびをしてアチラものと競争しようとしたり、引け目を感じたりしたって始まらないということだ。自分は自分なりにやるということだ。そんなことは当たり前だと言うであらうが、誠に当り前のことだが、なかなかそうはならないのである。

丁度自動車工業で、手取り早くアメリカのパテントを買って来た方が、日本で研究して新しいものを生み出すなどと馬鹿正直な方法より、よっぽど気がきいていると考えるように、教育の世界でもそういう習慣が強いようである。そういう点では自動車工業の方にまだ救いがあるようである。そういう

う自覚症状があり、療法もわかっているからである。所が教育界の場合はそうではなさそうである。

一時カリキュラム構成ということが流行したときに、多くの学校で電話帳的印刷物を作成することが行われた。多くの先生の研究的努力は大したものだった。が、よく考えてみるとそれはアチラ製のパテントを引き写していることだったのである。私は図書館で少女がスタイル・ブックを一生懸命引きうつす姿を思いうかべたものである。それも大変結構なことだが、何故いま現に自分の着ている衣裳が何であり、自分の体のどこに似合わせ所があるかを鏡の前でしらべてみることをしないかということである。まず自分の現実をみてよく考えるべきだといいたいのである。

私も時折は現場の先生方と話し合いをすることがある。そういう時、よく感ずるのであるが、現場の先生は私に万能膏を出すことを要求しているのではないかということである。「あなたがよく御考えなさい」というと「考えたけれど

もわからない」と言うのである。「結局自分はどうしたらよいでしょう」といった質問が出て来るのである。これはわれわれ日本人の頭の弱さであろうかと考えらされる可能性がある。

だがここで何時も気がつくことは、そういう人たちは、現に自分が何をやっているかということをも明確につかんでいないことである。

自分がどういう着物をきているかを鏡にうつしてみていないのである。つまり自分の現実をつかむという方法を心得ていないのだ。自分のやっていることは自分が一番よく知っているというかも知れないが、そうではないようである。

自分のやっていることをよく知っている人ならば、教育実践の改造などということが、一月や半年ですっかり出来るなどは考えないであろう。いくら流行の衣裳を次々と着かえても、自分の体に合ったものでなければいつまでたってもピッタリしないのである。自分の体にあつたといつてもそれは一挙にこれだということとは出来ないで、細かい部分を順次しら

べて行き、部分部分を直して行き、そうして全体に及ぶのである。

部分を直すときも全体のことを無視することは出来ないが、全体ばかり見ていたのでは、いつまでもピッタリしないのである。ところがこと教育のことになる、一挙に着かえてしまうことが多いようである。そういう考えの人が多いと思う。

教育実践のための研究といっていることで、知らず知らず、こうした廊下トンビ式研究に陥っているのが殆んどすべてだといったら言いすぎになるだろうか。積みあげる教育研究と実践ということがもっと本格的に考えられねばならぬと思う。

そしてそれが、どういう教師の組織や方法でなされるかが考えられ実現されなければ、何時までたつても教師は自主性をもたず、徒らに中央の御意見を伺い、権威に屈服する域を脱しないであろう。それが教育界に植民地的流行をくりあげているのである。

(国立教育研究所員)